

第15回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「冬馬とカンタ」

兵庫県立洲本高校三年 田中 春日



賢治のまちから  
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

## 『冬馬とカンタ』

兵庫県立洲本高等学校三年 田中 春日はるひ

「冬馬！ そんなの一瞬だよ！」

夏の暑い日に、カンタは言った。その日は終業式で、冬馬は初めてカンタに、夏休みが終わったら東京に引っ越すことを話した。

「でも、東京だよ？ ここから、一日もかかるんだよ？」

冬馬は泣くのを止めて、カンタを見た。二人で長い坂道を登りながら話す。登校するときは下り坂になるので、一人で足がもつれそうになりながら駆け下りる。その坂も後少しで終わりという時にカンタはそう言って、一気に坂を登りきった。

「二人だけで、車でトウヒコウしよう！ ズーッと遠くまで逃げるんだ！」  
 「トウヒコウってなに？」冬馬も追いついて、肩で息をしながらカンタに聞いた。

「悪い奴とか、追いかけてくる奴から、二人で逃げるんだよ。ほら、愛のトウヒコウって言うじゃん！」

「それって、恋人同士がやるんじゃないの？」

「もう！ 細かいことはいいから！」

学校の近くで拾った、長い木の棒を後ろに放り投げカンタは冬馬の手をつかんで、いきなり走り出した。引っ張られるまま走り続けて、キ代ばあちゃんの家に着いた。キ代ばあちゃんは、二人の団地の近くに一人で暮らしている。八十歳をとうにこえているというのに、とても元気で家の裏の畠や、トラクターの故障、屋根を直すのだって全部一人でやってのける。しわしわな顔が、笑うと余計しわしわになつて、二人が「うめぼし！ すっぱーい！」というと、もつと顔をしわくちゃにして、頭をがしがしなでてくる。冬馬のお父さんは家に帰つてくるのが遅いので、キ代ばあちゃん家によくお世話をなつていた。



二人がついた時、キ代ばあちゃんは庭でシイタケを干していた。二人が来たのを見ると手をとめて、にっこり笑って、  
 「よく来たね。さあお昼にしようかい」

と言つて、まだザルの上に残つていたシイタケをひよいひよいつと手際良く並べ終え、玄関に向かつた。冬馬たちもついて行つて中に入る。キ代ばあちゃん家はクーラーなんてないのに、いつもひんやりしている。縁側に座つて、犬のリンをなでていると、キ代ばあちゃんが冷麦ひやむぎを三つ持つててくれた。冷麦はキ代ばあちゃん家でとれたキュウリやトマトの下に、ふりふりした麺めんがたつぱりと隠れている。

三人で縁側に座つて、冷麦をずるずると食べる。冷麦が終わると、キ代ばあちゃんは大きなスイカを三切れもつてきて、また縁側に座つた。

「じゃあ、何かい？ 冬馬は夏休みが終わつたら、東京に戻るのかい？」

冬馬はスイカを受け取りながら、ぶすっとした顔でうなずいた。そうだつたと、カンタはまた思いだした。夏休みが終わるのなんて、去年と一緒にあつという間に違ひない。冬馬はスイカを一口ぱくつと食べて、

「ぼく、嫌だ。東京に行くの。東京に行きたいなんて一言も言つてないもん」と言つた。キ代ばあちゃんはちよつとしてから、スイカをぱくつと食べて、「冬馬がいなくなるのはさみしいねえ」と言つた。

「カンタとキ代ばあちゃんのいない所なんて嫌だ、遠いし。僕らこんな仲良いのに」

冬馬はそう言つと、ぶすっとしたままスイカをぱくぱく食べた。キ代ばあちゃんは何か考へている風にしてから、

「距離なんて関係あるのかい？」

そう言つて、ふつと種を庭に飛ばした。

ご飯も食べ終わつて、昼寝をして、三人でリンの散歩をしたところで、五時の鐘がなつた。「からすのこ」を聞きながら、玄関に向かう。ランドセルを背負つて、ばいばい、と二人で言つと、キ代ばあちゃんは頭をなでながら、「冬馬、カンタ、またおいで」と言つた。心なしかいつもより、がしがしが優しい気がした。



二人の団地にだんだんと近づいてきた。カンタは立ち止まって、ポケットに入っていた、赤いミニカーを取り出した。そしてそれをカンタに突き出し、「やる」と言った。冬馬は少しショックそうな顔をしてから、むつとしたように、「いらない！ 何なの、センベツってやつ？」

そう言って、カンタの手を勢いよく払った。冬馬の手はカンタの手より少し上、ミニカーに直撃して、ミニカーがふつとんだ。

「あつ！」

カンタの大きな声が響く。ミニカーは綺麗に真っ直ぐ飛んで、横にあつた田んぼにぽちゃんと落ちた。

「おれの車！」

がばっと田んぼを覗いたが、ふくふくと小さな泡を残して、ミニカーは沈んでいった。

「ごめん……。ごめん、カンター！」

と言つて、エンエン泣き出した。辺りは夕暮れで、田んぼの水に光が反射して底がよく見えない。カンタは道路に座り込んだまま、冬馬の泣く声を聞いていた。こぼつと最後の泡が消えた。あーあ、ミニカー。俺の宝物だったのに。カンタはなんとも言えない気持ちになつた。しかし、泡が消えた途端、今度はぼこぼこ音がして、何かが田んぼから出て來た。次の瞬間、ぼんつという音がして、田んぼの中から、遊園地のゴーカートほどの大きさになつたミニカーが現れた。ちょうど二人乗りで、こどもが乗れるくらいで、カンタと冬馬にぴつたりだつた。二人は突然のこととぽかんとなつた。しかしこの瞬間、カンタに良い考えが浮かんだ。

「冬馬！ 車！ トウヒコウできるよ！ 東京も追いつかないよ！」

二人で顔を見合わせて、田んぼの中に降り、車のところまで走つた。心なしか、田んぼの水が減つたような気がした。まるで車がスポンジになつたみたいだつた。カンタはあせるように、ドアを開けて刺さつている鍵を回すと、ぶうーんと音がしてエンジンがかかつた。二人で顔を見合わせると、うなづいて車に飛び乗つた。

「トウヒコウ、しゅっぱつ！」

カンタはそう言って思いつきり、アクセルを踏み込んだ。



いつも走つても走つても追いつかないとんぼにだつて、追いついて追いついて追い越す。キ代ばあちゃん家の横を通るとリンが、ぼくも乗せてよ！つていうみたいに吠えている。窓から外を見ると、そのリンも凄い速さで後ろに流れていく。道端の雑草や、木もびゅんびゅん追い抜いて、僕たち速すぎて、忍者にみえるんじゃないの、と、一人で少し笑つた。そして一人でいつも通つて帰つた、長い長い坂道がやつてきた。

走るのとは比べ物にならない速さで、坂を下りる。自分の足で走るよりはるかに早いはずなのに、でもとても長く感じる。あまりにも長くて、このままずーっとシートベルトがちょっと食い込んで前のめりのままなのかな、とカンタは少しどきどきした。冬馬もべたつとフロントガラスに張り付いて空を見上げている。速すぎて、今にも空へ飛んでいきそうだ。突然横に続いていた木がなくなり、視界が広くなつた。いつもの坂道を走つていたのに、いつのまにか道のはしつこはガードレールだけで、田んぼはなくなつていた。そして田んぼは、一面の海になつていた。坂道は海の上を走る一本の橋みたいになつっていた。前のめりのままカンタは空を見上げて言つた。

「わあ……」

見たこともない光景が広がつていた。真っ暗な夜空の中に、キラキラと魔法の粉みたいに、星がたくさん輝いている。星は海にも映つていて、海が波打つたびにふるふると震えていた。空も海も、星だらけでふわふわ飛んでるみたいだな、とカンタは思つた。

「ねえ、冬馬！ 星が凄くキレイ！ 魔法の粉みたいだよ！」

冬馬は首がとれそうなほどうなずいて、  
「多分、そのおかげで僕たち魔法にかかるんだよ！」

そう言つて、こつちを見てニシシと笑つた。カンタはこの笑顔が本当に大好きだ。その笑顔が一ヶ月後、どこかに行つてしまつなんて信じられなかつた。

もう少し走つていると看板のようなものと、その先の道路が二つに分かれているのが見えた。一方は真っ直ぐで、もう一方は空に続いているように見えた。看板まで近づいてから、車をキキーッと止めると、看板には、



右→空中図書館・十キロ

と書いてあつた。カンタは空！と思つた。ここではたと、思い出した。冬馬の大好物はプリンだつた。恐る恐る冬馬の方を向くと、冬馬はこつちを見つめていた。そして上を指差し、

「空！」

と言つて、またニシシと笑つた。

車のエンジンをかけ直して、右の長い坂道を上がる。海から離れて少し前から、小さな雲が車の周りをフワフワ漂うようになつてきた。まだかなあと二人で話していたら、ひときわ大きな雲が見えて來た。その手前に、駐車場と思われるスペースがあつたのでそこに入り、車を止めた。カンタは運転席のドアを開けて、そーっと足を降ろす。なんていつたつて、雲の上だ。気を抜いたら、足が抜けて海にまつさかさまかもしれない。しかし案外雲の上はしつかりしていて、土の上とそう変わらなかつた。『空中図書館はこちらへ』という看板に従つて、二人で雲の階段を登りはじめた。

階段を登り終えると、大きな建物が現れた。

「すげえ、建物……」

二人はほおつとなつた。こんな建物、テレビで見たことあるなあ、なんとか神殿、なんだつけ、パピップペボ？神殿だつけ。いや、違う。そんなんじゃない、パップペボボとかそんなんだつた、と二人でワイワイやつてると、その横を、二人組の女人がクスクス笑いながら、建物に入つて行つた。二人で顔を見合わせて、

「行くぞ！」

と照れ隠しにカンタは言うと勢いよく冬馬を引っ張つた。

大きい柱の間を通り抜けて、大きな扉を開けて建物に入ると一人は思わず、立ち止まつた。真ん中には机と柔らかそうなソファが沢山あつて吹き抜けになつてゐる。全部で八階程だらうか。吹き抜けに面して、各階に廊下があつてその奥に本棚が見える。石造の建物に、深い赤のカーペット。少しくすんだ金色の雲の装飾がいたるところに見える。天井には大きな六角形の窓がついていて、星と月が見えた。きれいな楽器の音がBGMで流れている。本当に凄くきれいだ。そこにいる人たちのひそひそ話す声まで、なにかの楽器の音みたに思えた。今まで來た図書館の中でナンバーワンなのは間違いない。



賢治のまちから

## 高校生☆讀書大賞

カンタはふと、となりに冬馬がいないことに気づいた。うわ、と思っていると、冬馬が走って来て、

「カンタ、これ見て！」

と小声で言うや否や、Tシャツのえりを掴んで、入口のすぐ横にある図書館の案内みたいなところにカンタを連れて行つた。

「ぐえ、首しまるだろ！」

カンタが言うと、冬馬が苦笑いしながら、

「『めんごめん。でもさ、これみて、凄くない!? ほら、五階で『空のお菓子展』やってるって書いてあるよ、行こうよ!』

と言つた。なるほど、確かにそう書いてある。カウンターから、女人人が、「何かお探しですか?」

と声をかけて來た。黒い目にうす〜く青がかつていて、さつきの海みたいだな、とカンタは思つた。しかし何かおかしい。図書館に來ている人は、よく見ると、みんな耳がピーンとがつてゐる。大人、子供、おじいちゃん、おばあちゃんまで、みんなとがつてゐた。そしておかしいと思ったのは、もちろんこの女人の人も耳がとがつていたからだつた。カンタと冬馬が何も言わずにいると、女人人は怪訝けげんそうな顔をしてから、二人をじーっと見て、「あれ、あなた達、耳が何か変ね……」

と言いながら、冬馬の耳に向かつて手を伸ばして來た。カンタは直感でやばい!と思つた。

「お姉さん! これ、そこで誰か落としたみたい!」

そう言つて、ポケットに手を伸ばして、虫のおもちゃを握つて取り出した。女人人は冬馬に伸ばして いた手をカンタの方に向けて、

「何かしら? 私が預かつとくわ」

と言つて、手を差し出した。カンタは女人の人の手の平の上で、ぱつと手を開いておもちゃを渡すと、冬馬の手を引っ張つて、すぐ横のエレベーターに飛び乗つた。ドアが閉まる時、女人人がひいつとつて、投げた虫のおもちゃがカウンターの中にいたすぐ横の男の人にヒットしたのが見えた。

これまた豪華な造りのエレベーターが五階で止まるといつくりと開いた。

「うわあ……」



そこはアートバルーンみたいなので作られたアーチに『空のお菓子展』と書かれた幕が垂れ下がり、その向こう側に小ぶりのスペースをいっぱいぱいに使って、色んなお菓子が並んでいた。雲の形のキャンディやガム、星みたいにキラキラ光っているゼリーや、虹色のチョコレートフォンデュみたいなのもある。その中でもひときわ凄いのが、ふわふわと宙に浮いている雲だつた。いや、よくみると綿菓子みたいだ。いつもよく見るような、白い色の物もあれば、夜みたいに暗い色のものや、夕焼けのオレンジや、ピンクみたいな色もあつた。その下で子供たちが割り箸みたいな棒を握つて、綿菓子をふすっと刺して、くるくるっと巻き取ると、おい美味しそうにむしゃむしゃ食べだした。冬馬と顔を見合させて、ニシシと笑うと一人で綿菓子の所へ走り出した。近くにいた大人の人から棒を貰うと、カンタは白い綿菓子をふすつと刺そうとしたが、雲がひよいつと逃げた。うん？と思つてもう一回刺そうとすると、またひよいつと逃げる。力一歩きで雲と格闘していると、とんつと誰かに当たつた。冬馬だつた。

「カンタ！ 雲つかまらないんだけど！」

とちよつとふりふり怒つて、大きな声で言つた。すると、周りにいた大人、子供が一斉にぱつとこっちを振り返つた。すると一番近くにいた男の子がカントタの耳を指差して、

「耳が丸い！ 地球人だ！」

と叫んだ。なんだそれ、と思い終わるか終わらないかのうちに、周りの人達が騒ぎ始めた。口ぐちに警察だ、誰か、と叫んでいる。

「あれ？ なんか、やばい？」

二人は手を繋いで、人ごみの中を走りだした。一目散にエレベーターに飛び乗ると、一階のボタンを何回も押す。チーンという音がして扉が開くと、白い警察官の制服を着た男の人が三人立つていた。もちろん耳はとがつている。真ん中の警察官が、手帳みたいなのを取り出して、二人に突き付けた。

「空中警察だ。地球人が現れたと通報を受けたので駆けつけた。地球人はお前たちだな？」

どくん、どくんと心臓の音がやけに大きく聞こえる。足がすくんで動かない。そんなカンタの目の前で、冬馬がいきなり警察手帳をぱつと奪つて、思



いつきり遠くに投げた。やっぱり冬馬は一シシと笑っている。手帳はきれいに、真ん中の吹き抜けに吸い込まれていった。ぽかんとしていた警察官が、「……な、なにをする！」

と慌てて手帳を取りに走った。しめたとばかりに、一人で走り出した。階段を急いで駆け下りて、車に飛び乗った。エンジンをかけて、とりあえずここから離れるために走り出した。後ろからパトカーの音が聞こえてくる。カンタはハンドルをぎゅっと握った。

無我夢中で走り続けたので、カンタは今どこを走っているのか分からなくなつた。時計もないし、お腹が減つて來た。今何時なんだろう？ パトカーとの、でたらめなカー・チエイスのせいで、二人は帰り道を見失い、どんどん空に向かって走っていた。来た時は夕暮れくらいだったのに、外はもう真つ暗だ。途方に暮れるカンタの横で、

「もう帰りたい……」

と冬馬が泣きだした。

「冬馬……。おれも……」

ガ「ン」とカンタの言葉が遮られた。何が起こつたのか慌てて外を見たが、真つ暗で何も見えない。後ろを振り返つた冬馬が叫んだ。

「カンタ、後ろ！」

後ろを振り向くと、そこは暗い空に浮かんだ地球が見えた。地球は青かつた、と誰か昔の人が言つたらしいけど、本当に青かつた。夏の空みたいだった。

「カンタ、宇宙！」

「カンタ、前見て！ 危ない！」

目の前にあつた、大きな惑星のようなものに、思いつきりぶつかつた。衝撃で二人は車から放り出された。

「いてて……。冬馬、だいじょうぶ？」

「うん、だいじょうぶ。それより、みてこれ。車が」

そう言う冬馬の手をのぞきこむと、ミニカーは元通りの大きさに戻つた。冬馬がカンタの方にミニカーを手渡してきた。

「これは冬馬が持つてて」



カンタがそう言つと、冬馬はミニカーをぎゅっと握りしめ、大事そうにポケットにしまつた。

「ここどこだらう？ 宇宙なのに、全然苦しくない」

真っ暗で、何の音もしない。音が何もし無さ過ぎて、耳が痛くなりそうだった。いつも見る、何倍もの数の星が点々と輝いている。カンタは、ここまで来た長い道のりを思い出した。キ代ばあちゃん家を出て、ミニカーがおつきくなつて、海の上を走つて、空から逃げて、宇宙まで来てしまつた。でも、カンタは途中で気付いていた。そして冬馬に言つなら今しかないとthought。横にいる冬馬を見ると、うわ、すごい！と何回も言いながら、忙しく星を見ている。カンタは突然恥ずかしくなつたので、ぼそつと、

「距離なんて関係ないよ」

と言つた。こんな宇宙まで来たんだ。東京なんてあつという間に決まつてゐる。

冬馬はピタッと止まつて、

「ぼくも言おうと思つてた」

と言つて、シシと笑つた。

「ワン、ワン、ワン！」

二人がはつと目を覚ますと、リンが凄く近くで吠えていた。そこは宇宙じゃなくて、キ代ばあちゃんの家だつた。

「起きたのかい？」

キ代ばあちゃんが顔を覗きこんできた。そうだ、ご飯を食べて、昼寝の中だつたんだ。でも、二人は宇宙まで行つた。それは確かだつた。

「キ代ばあちゃん、あのね、距離なんて関係ないよね」

二人が同時にそつ言つと、キ代ばあちゃんは少し驚いた顔をして、「当たり前だよ」

と言つと、いつもみたいに顔をしわくちゃにして、一人の頭をガシガシなでた。